

## 実践報告

### 本学におけるアクティブ・ラーニングの取り組み

#### Active learning activities at Musashigaoka College

田中直美<sup>1)</sup> 川井明<sup>1)</sup> 辻将也<sup>1)</sup> 田本育代<sup>1)</sup> 大野勝生<sup>1)</sup> 田中智輝<sup>2)</sup> 村松灯<sup>2)</sup>  
Naomi Tanaka<sup>1)</sup>, Akira Kawai<sup>1)</sup>, Masaya Tsuji<sup>1)</sup>, Ikuyo Tamoto<sup>1)</sup>, Katsuo Ohno<sup>1)</sup>,  
Tomoki Tanaka<sup>2)</sup>, Tomo Muramatsu<sup>2)</sup>

1) 武蔵丘短期大学 2) 立教大学

#### Abstract

本稿では、武蔵丘短期大学健康生活学科健康スポーツ専攻・健康マネジメント専攻における教育の質的向上に向けて行っている活動の一部を報告する。具体的には、2018年度より開始した教員間での授業見学の取り組みを、その方法や効果(Ⅱ節)、および外部講師を招いて行った研修会(Ⅲ節)に分けて報告する。Ⅱ節でも示されているように、教員たちがよりよい授業を提供するためにこうした取り組みの必要性を感じていることから、つねに「より良い授業」を目指し、こうした活動を今後も組織的に取り組むことが今後の課題となるだろう。

キーワード: アクティブ・ラーニング、より良い授業づくり、主体的な学習、授業公開と見学

### I はじめに

本稿は、武蔵丘短期大学健康生活学科健康スポーツ専攻・健康マネジメント専攻における教育の質的向上に向けて行っている取り組みの一部を報告するものである。

健康スポーツ専攻では、2017年12月より、教員がカリキュラム部会とアクティブ・ラーニング部会(以下、AL部会とする)に分かれ、活動してきた。AL部会のメンバーは、田中、川井、辻、田本、大野の5名であるが、途中健康マネジメント専攻も巻き込み、実際の取り組みとしては健康スポーツ専攻と健康マネジメント専攻の全教員が協力するかたちで行われてきた。

今回は、2017年12月から2019年9月までの活動、具体的には、2018年度より開始した教員間での授業見学の取り組みを、その方法や効果(Ⅱ節)、および外部講師を招いて行った研修会(Ⅲ節)に分けて報告する。

### II 実践報告

健康スポーツ専攻では、表1のように、本学における「より良い授業づくり」のための検討を重ねてきた。第1回から第3回までの会合では、カリキュラムを含めた教育課程の全体的な検討が行われてき

た。その後「カリキュラム」と「授業」を切り離して検討していくこととなった。そこで、「より良い授業づくり」を目指すうえで、アクティブ・ラーニングに着目し、AL部会として活動をはじめた。近年、国内の教育界においてもアクティブ・ラーニングが注目され奨励されるなかで、本学での実現の可能性を模索しはじめたのだ。当初は、海外の専門家の資料を紐解き、「アクティブ・ラーニング」の理解を深め、その後は、試行錯誤しながら実際に健康スポーツ専攻の教員間で、授業の公開や見学をはじめた。あわせて、研修会を開催してアクティブ・ラーニングの専門家を招聘し、その実践的なモデル授業を見学することで、それぞれの教育能力の質を高めるための研鑽を行った。今回は、本学の「より良い授業づくり」のための組織的な取り組みの中間報告を行うこととする。

#### 1. 授業公開と見学について

教員の教育能力の質を高めて、より良い授業づくりを目指すために、表2のように教員間で担当授業の公開や見学が行われている。2018年度の前学期の3か月では、月毎に授業を公開する担当教員を均等に振り分けた。担当教員は、月に2科目以上(実技科目も含む)を公開することとした。

回	日付	内容
第1回	2017/12/14(木)	本学における「より良い授業づくり」のための検討
第2回	2017/12/18(月)	
第3回	2018/1/15(月)	
第4回	2018/1/22(月)	カリキュラム検討(AL部会とカリキュラム検討部会)＋今後の資料作成
第5回	2018/2/5(月)	アクティブ・ラーニングへの取り組みに関する資料作成
第6回	2018/2/19(月)	健康スポーツ専攻におけるアクティブ・ラーニングに関するプレゼンテーション
研修会	2018/3/22(木)	「リアセック」によるアクティブ・ラーニングに関する研修会
第7回	2018/3/29(木)	健康スポーツ専攻における授業公開への具体案の検討
第8回	2018/4/2(月)	
第9回	2018/4/26(木)	
第10回	2018/5/21(月)	授業公開の実施状況およびALへの今度の取り組み方の検討
研修会	2018/5/29(火)	埼玉県総合教育センター野口高志氏によるアクティブ・ラーニングのモデル授業
第11回	2018/6/18(月)	後学期における授業公開の方法についての検討
第12回	2018/7/2(月)	
第13回	2018/8/2(木)	アクティブ・ラーニングの前学期のふりかえり
第14回	2018/10/15(月)	授業公開の全学実施についての検討および変更点に対する評価
第15回	2018/11/29(木)	授業公開の取り組み方の検討およびAL部会の取り組み方について
第16回	2018/12/11(火)	これまでの取り組みについての総括と今後の検討
第17回	2019/4/1(月)	新年度の具体案及びアクティブ・ラーニングに関する研修会の検討
第18回	2019/4/15(月)	健康マネジメント専攻を含めた授業公開の提案
研修会	2019/7/9(火)	田中 智輝・村松 灯(立教大)研修会「学生と考えるアクティブな授業作り」
第19回	2019/7/22(月)	AL部会の取り組みに関する実践報告の検討
第20回	2019/7/23(火)	
第21回	2019/7/29(月)	
第22回	2019/8/2(金)	

また、見学は毎月2コマ以上を必須とした。2018年度における学期の3か月間では、健康マネジメント専攻も加わり、全教員が毎月1科目以上の授業公開と、毎月2コマ以上の見学が必須へと新しく変更された。2019年度における前学期の3か月においては、当初と同様に月毎で授業を公開する教員を振り分けて、1コマの授業公開へと変更された。見学についても毎月1コマ以上へと変更された。表1のように、AL部会で定期的に検討を重ね、授業公開と見学の方法が変遷した。



図1 AL授業公開風景

表2 公開授業一覧

2018	担当	公開授業		公開・見学方法	
5月	荒川	コンディショニング論	検査・測定と評価実習	<2018年度前学期> 健康スポーツ専攻 公開:担当月間2教科 見学:毎月2コマ以上	
	大野	教職概論	教育原理		
	田中	教育原理	自己表現とキャリア		
	辻	陸上競技2	運動生理学実習		
6月	江原	健康スポーツ実習(ゴルフ)	情報機器操作		
	川井	体育原理	球技1(バスケットボール)		
	杉山	運動スポーツ基礎理論			
	田本	球技1(サッカー)			
7月	佐藤	解剖生理学	健康管理論		
	高橋	スポーツ医学	球技1(ハンドボール)		
	玉木	運動生理学	運動生理学実習		
10月	荒川	スポーツ解剖学2			<2018年度後学期> 健康スポーツ専攻 健康マネジメント専攻 公開:毎月1教科 見学:毎月2コマ
	江原	情報機器操作			
	川井	球技2(バスケットボール)			
	佐藤	衛生学及び公衆衛生学			
	杉山	球技2(バレーボール)			
	高橋	GFI試験対策講座			
	田中	生徒指導			
	玉木	バイオメカニクス			
	田本	サッカー・フットサル			
辻	保健体育科教育法				
11月	荒川	アスレティックトレーナー論			
	植松	英語コミュニケーション I			
	江原	情報機器操作			
	川井	球技2(バスケットボール)			
	佐藤	球技1(テニス)			
	杉山	球技2(バレーボール)			
	高橋	スポーツ医学実習			
	田中	生徒指導			
	玉木	バイオメカニクス			
	田本	サッカー・フットサル			
	辻	保健体育科教育法			
	12月	福島	レクリエーション論		
荒川		アスレティックトレーナー論			
植松		英語コミュニケーション I			
江原		情報機器操作			
川井		球技2(バスケットボール)			
高橋		スポーツ医学実習			
田中		道徳教育の理論と実践			
玉木		バイオメカニクス			
田本		サッカー・フットサル			
辻		スポーツ生理学			
福島		レクリエーション論			
2019	担当	公開授業		公開・見学方法	
5月	大野	教育概論		<2019年度前学期> 健康スポーツ専攻 健康マネジメント専攻 公開:担当月1コマ 見学:毎月1コマ	
	川井	球技1(バスケットボール)			
	田中	自己表現とキャリア			
	田本	球技1(サッカー)			
	辻	陸上競技1			
6月	荒川	コンディショニング論			
	植松	英語コミュニケーション I			
	江原	ゴルフ1			
	佐藤	ビジネス文書(パワーポイント)			
7月	高橋	スポーツ医学			
	田中	教育原理			
	玉木	バイオメカニクス			

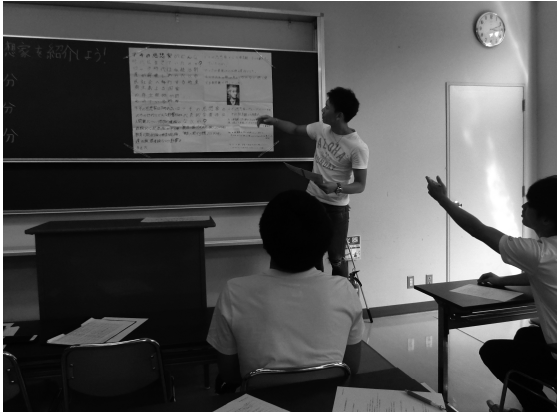


図2 AL 授業公開風景

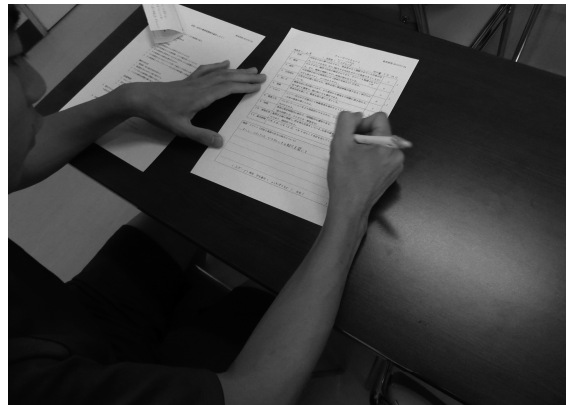


図5 AL 授業公開風景



図3 AL 授業公開風景



図4 AL 授業公開風景

## 2. シラバスの作成について

授業を公開する際には、授業の流れを見学者が理解し、円滑に授業を受けられるように、予めシラバスの作成が義務付けされている。シラバスの様式は、以下のようにになっている。

### <シラバスの様式>

- ・日時
- ・授業形態
- ・教室
- ・科目名
- ・担当者名
- ・ねらい

※～（方法）によって～（内容）を身に付ける

- ・ひとこと

### <実際のシラバス>

5月9日（水）3限 講義：2209 教室

教育原理

担当：田中

<ねらい>

最低限の思想家の考えを、3つの「子ども観」と「教育観」のタイプに分けて学ぶ。各自の「子ども観」と「教育観」との相違を考えさせることによって、知識を身に付ける。

<ひとこと>

1年生の教職必修です。前回は慣れてきたのか関係のない私語が目立ったので、席を指定しようかと考えています。昨年度は思想家ごとに知識を伝えていましたが、今年度は3つのタイプから試みます。

### 3. コメントシートについて

公開されている授業を見学した際には、授業に対するコメントを残すこととした。コメントシートの内容について、図6のように『全体・前半・後半』と分割し、『よかったこと』や『質問』を付箋に記入し、貼付することとした。

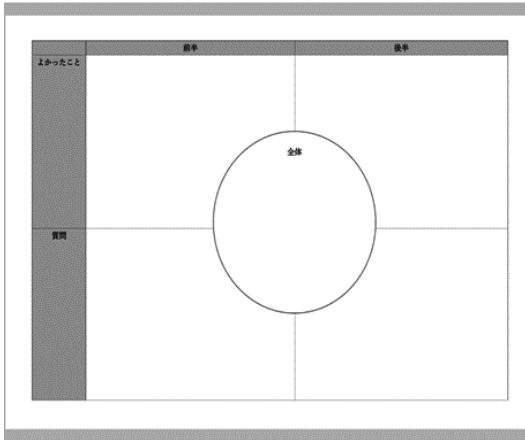


図6 前学期のコメントシート

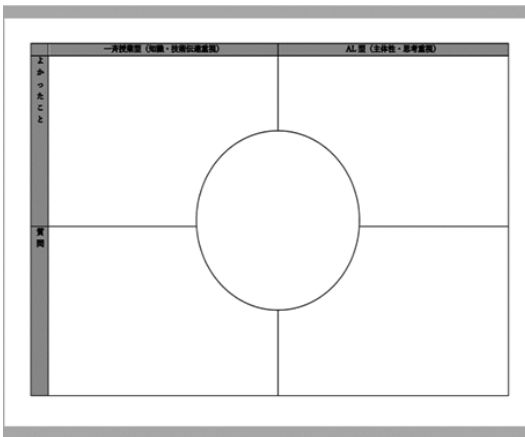


図7 後期のコメントシート

第11回および12回目のAL部会にて、後学期における授業公開についての検討会が実施され、コメントシートの内容を変更することとした(図7)。変更理由として、授業や担当教諭により授業の形態がさまざまであり、『一斉授業型』と『AL型』の二つの視点から『よかったこと』や『質問』をコメントできるものに変更した。なお、コメントの内容については、批判的な内容ではなく授業がより良くなるようなポジティブな感想や質問となるようAL部会

よりお願いした。

図8に見学者から実際にいただいたコメントを示した。コメントシートおよび付箋については授業担当者が教室の後方に用意しておくこととした。

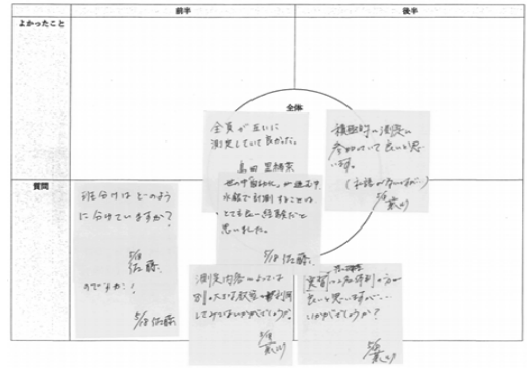


図8 コメント入りのシート

### 4. 授業公開・見学の感想及び半期ふりかえりについて

図9の通り、「より良い授業づくり」への取り組みを改善していくために、授業を公開した感想と見学した感想を月ごとに提出してもらうこととした。



図9 授業見学のふりかえりシート(月毎)

授業を公開した感想と見学した感想の一部を表3にまとめた。公開した感想について、「公開するということで、普段以上に授業内容の工夫をしようと、プラスに働いた」や「毎回緊張感があって、自分の

授業を振り返るきっかけになる」、「授業に関して、自分なりの意図があったが、コメントを頂けることで、違った見方や進め方が発見できる」というように、ポジティブな意見が多かった。見学した感想について、「積極的にアクティブ・ラーニングを実施していた授業だったので、今後の参考にしたい」や「映像資料の使い方について、これまで自身ではあまり意識していなかったところなので、大変参考になりました」というように、他教員のアクティブ・ラーニング型の授業を見学することができたという意見や自身の授業にとって新たな展開の発見につながったというような意見が多かった。

表 3 授業を公開・見学した感想の一覧

**授業を公開した感想**

- ・公開するということで、普段以上に授業内容の工夫をしようと、プラスに働いた
- ・授業準備やグループワークについて、良かった点や学生の状況をもとめていただけた
- ・毎回緊張感があって、自分の授業を改めて振り返るきっかけになる
- ・授業に関して、自分なりの意図があったが、コメントを頂けることで、違った見方や進め方が発見できる
- ・見学者はいなかったが、公開の有無にかかわらず、授業に臨む際の緊張感を失わないようにしなければいけないと再認識できた
- ・頂いたコメントを授業で取り組んだら、内容や進行に良い変化が現れたので良かった

**授業を見学した感想**

- ・積極的にアクティブ・ラーニングを実施していた授業だったので、今後の参考にしたい
- ・きつい実技にも笑顔で取り組む姿勢があり、先生のひとつの声掛けや、わかりやすい説明、熱い思いがあるからだと感じる事ができた
- ・グループでの学習を中心に、学生たちの主体的な活動が引き出される、まさにアクティブ・ラーニングを見学することができた
- ・映像資料の使い方について、これまで自身ではあまり意識していなかったところなので、大変参考になりました
- ・知識の再確認の問いの展開から、ペア学習を用いたアクティブ・ラーニングを展開するなど、とても工夫された授業を見学させていただいた

また、図 10 の通り、授業見学の取り組みをより良くすることを目的として、半期の取り組みに対す

るコメントおよび今後の改善点についてのコメントを提出してもらうこととした。

授業見学ふりかえりシート \_\_\_\_\_ 先生

1 半期のあいだ授業見学（公開・見学）をやってみた感想を教えてください。どんなところがよかったですか。

2 ほかの先生の授業（ALまたは知識教授型）を見学して、ご自身の授業の質が向上すると感じたところはどんなところですか。

3 今後授業見学を続けるにあたり、授業見学自体で工夫したほうがいい点や、こういう形でやってみたいなど、ご意見がありましたらご記入ください。

図 10 授業見学のふりかえりシート（月毎）

提出していただいたコメントについては教員間で共有することとした。提出いただいたコメントの一部を表 4 にまとめた。問 1・2 について、他の教員の授業や形態（講義・実習・実技）の違う授業を見学することで、自身の授業の新たな展開や改善につながるという意見が多かった。また、今後も継続して授業見学を実施していきたいという意見もあった。問 3 について、コメントシートを通じた質問の方法に対する意見や、見学の方法についての意見をいただいた。

今後の授業見学をより良くしていくための参考にしていきたい。

表 4 半期のふりかえりに対するコメントの一覧

## 授業見学ふりかえりシート

1 半期のあいだ授業見学（公開・見学）をやってみた感想を教えてください。どんなところがよかったですか
<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の授業を見学することで、新たな考え方や工夫に気づくことができ、大変参考になった</li> <li>・今後も継続して授業見学を実施し、自分自身で工夫した点がどうだったのか、アドバイスを頂けると、より良い授業づくりになると感じる</li> <li>・見学では普段見ることのない他の先生方の授業を見学することで、自身の授業展開との違いや学生への声かけなど、気づけることが多くあったのでよかった</li> <li>・実技、実習、講義といった違いを超えて、見習うべき点があり、自己の授業の改善につながるものがあった</li> </ul>
2 ほかの先生の授業（ALまたは知識授業型）を見学して、ご自身の授業の質が向上すると感じたところはどんなところですか
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分では考えつかなかった授業展開や工夫に気づくことができ、大変参考になった</li> <li>・授業見学で気づいたことをすぐに自身の授業に取り入れることが難しいので、今回の授業見学で気づいたことを来年度の授業展開に活かしていきたいと考えている</li> <li>・授業の形態にかかわらず、授業に先立った準備段階が重要であると感じられた点</li> </ul>
3 今後授業見学を続けるにあたり、授業見学自体で工夫したほうがよい点や、こういう形でやってみたいなど、ご意見がありましたら記入してください
<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問などはその場でやり取りするほうがイメージが作りやすく、ヒントも多いと思うので、授業見学後に授業担当の先生とディスカッションできる時間があると良いと思う</li> <li>・あらかじめ見学の意思を伝えてからの見学であったが、基本的に公開している授業であれば自由見学の形でも良いのではないかと感じた</li> </ul>

## Ⅲ AL 研修会の実践

## 1. 魅力的な授業作りに向けて

アクティブ・ラーニング型の授業といっても、そもそもアクティブ・ラーニングとはどういう意味なのか、どのような実践なのか、教員間でアクティブ・ラーニングについてのイメージを共有するため、2018年3月22日に株式会社リアセック教育開発支援グループの灘成昭氏に講演をしていただいた。

「アクティブ・ラーニング研究会～魅力的な授業作りに向けて～」というその講演では、アクティブ・

ラーニングの意味や難しさ、授業の作り方や実践例などを紹介していただいた。

最後に質疑応答の時間を設け、授業におけるポイント——たとえば授業の最初に到達目標を確認することや、ふりかえりの時間で学生一人ひとりが「できる」ということを確認することなど——も教えていただいた。当日は参加者に感想を書いていたがなかなかため、記憶しているかぎりでは、「実技の授業では、すでにアクティブ・ラーニング型になっているものもあるのではないか」「試験のための授業では、知識をどうしても伝えなければならないが、どうすればよいのか」など、様々な意見や質問が見られた。

本研修会では、アクティブ・ラーニングの必要性を教員一人ひとりが感じる研修会となった。

## 2. アクティブ・ラーニング教職員研修

続いて第2回目の研修会として、2018年5月29日に、埼玉県立総合教育センター主任指導主事である野口高志氏を外部講師として招聘し、本学学生を対象に実施されたジグソー法による模擬授業を見学させて頂いた。授業法の有効性等について研修を行った。

## 3. 学生と考えるアクティブな授業づくり

第3回目の研修会は、立教大学の田中智輝氏と村松灯氏を外部講師として招聘し、以下のように行われた。

## (1) 本研修の目的

アクティブ・ラーニングの視点に立った大学教育の質的な転換が言われてからすでに7年が経過しようとしている。こうしたなかで、様々な教育改善の試みが盛んになされ、講義のあり方は大きく変わりつつある。その一方で、こうした試みが本当に学生の深い学びへと結実しているのかについては丁寧な検証と慎重な議論が求められている。

以上のような問題状況を背景としつつ、「学生と考えるアクティブな授業づくり」と題した本研修では、学生と教職員がそれぞれの視点から日々の講義やゼミを振り返り、対話を通して主体的で深い学びをいっそう充実させていくための方途を協同して探ることを試みた。以下では、本研修における対話を通じてどのような課題が明らかになり、その上で改善に向けた議論を通じていかなる示唆が得られたの

かを紹介することとする。

## (2) 本研修の対象

本研修は、2019年7月9日の第4時限に開催され、教職員の5名と、「教職概論」を履修している1年生、および「学校教育とスポーツ」を履修している2年生の24名の学生が参加した。



図8 AL研修会風景



図9 AL研修会風景

## (3) 研修の内容

研修は、①アクティブ・ラーニングの現状についての基調報告と、②教員と学生が「アクティブな授業」のために必要なポイントを共に考えるワークショップという、二つの部分から構成された。

①アクティブ・ラーニングの現状についての基調報告では、そもそも「アクティブ・ラーニング」という語は何を意味しているのか、そして、アクティブ・ラーニングの重要性が論じられるようになってきた背景について確認したうえで、高校や大学における実態から、アクティブな授業を考えていく際の

論点を整理した。

現在進められている高大接続改革の背景には、社会の急速な変化がある。この「社会の変化」には、グローバル化や情報化、人工知能をはじめとする科学技術の発展、さらには雇用システムの変化など、種々の変化が含まれている。だが、いずれにせよ確実なことは、それぞれの変化に対応するかたちで、社会において求められる資質や能力も大きく変わりつつあるということだ。これからの高校や大学での学びを考える際のキーワードとして、アクティブ・ラーニングの重要性が議論されるようになったのは、こうした文脈においてである。

「アクティブ・ラーニング」には様々な定義が存在するものの、それらに共通しているのは、学習活動に主体的・能動的（アクティブ）に参加する・できるような教授法ないし学習法を指す、という点である。ここで看過しえないのは、こうした「アクティブさ」には、思考や判断といった内的活動のそれも含まれるということだ。

東京大学中原淳研究室と日本教育研究イノベーションセンターが2015年から2017年に共同で実施した「高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点に立った参加型授業に関する実態調査」によると、全国の高校におけるアクティブ・ラーニング型授業の実施率は、2015年度で56.6%だったのに対し、2017年度で65.4%であり、3年間で8.8ポイント増となっている。これが大きな変化といえるかどうかは一義的には決められないが、高校におけるアクティブ・ラーニング型授業の実践は着実に増えているといえることができるだろう。

だが、アクティブ・ラーニングに対する高校生、大学生自身の反応は両義的である。「アクティブ・ラーニング疲れ」を訴える声や、教師の力量不足に対する不満もあがっている。とはいえ、大学で支持を得ている授業を調べると、グループ・ディスカッションやプレゼンテーションなどを取り入れた、アクティブ・ラーニングを促す授業であることが多いのもまた事実である。ここから言えるのは、いわゆる「アクティブ・ラーニング型」の授業を行えば（「型」や「方法」を取り入れさえすれば）良い授業になるというのではなく、良い授業はアクティブ・ラーニングを促している、ということだ。したがって、ア



クティブ・ラーニングを考えることは、結局のところ、「よい授業」とは何かを考えることに他ならない。

まさにこの点について教師と学生が共に議論を深めることを企図したのが、②「アクティブな授業」のポイントについて考えるワークショップである。本ワークショップでは、「こんな授業はいやだ」というテーマで意見を出し合ってもらい、そうした授業がなぜ嫌なのか、そうした授業を「いいね！な授業」にする工夫は何かについて、哲学対話の手法を用いて議論した。

「こんな授業はいやだ」という意見として多かったのは、「板書が多い授業」「先生の話を聞いているだけの授業」などで、当日はこれらの意見を中心的なテーマとして対話が進められた。なかでも板書が多い授業に関しては、こうした授業に否定的な理由として、「書くことに精一杯で、教員の話や授業の内容についていけなくなる」「余裕がなくなって、授業を聞くだけになり、理解するところまでいけない」「教科書の内容を板書するだけでなく、それについての教員自身の見解が聞きたい」などの意見が出た一方で、教員からは「共感するところも多いが、基礎知識として押さえなければならぬ内容があり、そうした内容については板書させたほうが理解を促せるのではないかと思える部分もある」といった声も複数聞かれた。だが、対話が進むなかで焦点化されてきたのは、板書自体の是非ではなく、板書の良さを活かした授業とはどのようなものかという点であった。学生の多くは、「板書が多い授業はいやだ」としつつも、あらかじめ用意されたものを機械的に提示される印象のあるパワーポイントよりも、板書のほうを好んでいることが明らかになった。板書は、授業が教室において現在進行形で創りあげられるものであるということ象徴的に表し、授業の内容について思考を深めるきっかけにもなることが指摘されたのである。こうした意見から、教員と学生が共に授業に携わる者として、どういったときに理解が進み、思考が深まるのかについて、対話を深めることができた。

#### (4) 本研修の成果と今後の課題

本研修では、最後に参加した学生と教職員に振り返りのコメントを書く時間を設けた。以下では、その記述をてがかりとして、本研修の成果と今後の課

題について若干の考察を試みることにしたい。

まず、学生からは「アクティブ・ラーニングの良さを今日少しわかった気がします。」といったように、アクティブ・ラーニングの意義や現在の実施状況について理解が深まったとの感想が多く寄せられた。また、本研修では哲学対話の手法を用いたワークショップを行ったが、これについても「普段は発言しなそうな人も、しっかりと自分の考えを持っていて、アクティブ・ラーニングはとても良いものだった。」といったように本研修自体をアクティブ・ラーニングの一例として肯定的に捉えた意見も寄せられた。さらに、「先生達の意見も聞いて貴重だった。」や、「先生と学生の意見がそれぞれ違っていて面白いと思いました。」といったように、学生と教職員と一緒に授業改善について考えるという取り組みの意義に言及したコメントも複数みられた。

教職員の振り返りにおいても、特に学生とともに授業改善について話し合えたことで様々な気づきが得られたことが窺える。たとえば、「アクティブ・ラーニングをもっと堅苦しく考えていた。固定概念を壊すことができた気がする。授業改善を、学生目線を交えて進めていくことがアクティブ・ラーニングになることに気づかされた。」といった感想や、「意外にパワーポイントよりも板書の方が好きだという学生が多くて興味深く感じた。」といった授業改善への示唆を得られたという意見が寄せられた。

加えて、研修終了後の教職員の対話においては、今回参加した学生の多くが教職を志す者であったことが非常に重要な意味をもっていたのではないかと指摘がなされた。というのも、学生はすでに自分自身が教師として授業をより良くするにはどうすればよいかという視点で本研修に参加しており、そうした自覚が芽生えているということ自体が教職員にとっては重要な発見であったという。実際に、振り返りにおいても「これから教育実習に行くにあたり、アクティブ・ラーニングを活用したいと思う。」「自分が教員になった時にはジグソー法を活用してみたい。」といった授業改善を自分たちの課題として捉えた意見が寄せられていた。このように、とりわけ教職を志す学生にとっては、現在自らが受講している講義をより良い学びの場にするというだけでなく、将来自分が教師となって授業担当し、改善を図って

いくための視点を獲得するという点でも一定の意義が存するものと思われる。

以上をまとめると、本研修の意義は以下の三点に集約される。第一に、アクティブ・ラーニングの意義と授業改善の試みの今日的状況を理解することを通じて、教職員と学生が授業改善への問題意識を共有することを期待できるという点が挙げられる。第二に、学生と教職員が自らの学びの経験を基礎としてより良い授業のあり方を考えることによって、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れるという表層的な変化ではなく、思考が深まるための条件を探るといふより本質的な層において授業改善の方途を探ることが可能になるという点が挙げられる。そして第三に、とりわけ教職を志す学生にとっては、教職への意識づけや教授法の習得にも資するという副次的な効果を期待できることが示唆された。

このような成果をふまえたうえで、最後に今後の課題を挙げておきたい。本研修の意義は、学生と教職員がともに授業改善への具体的な方途を探るといふ点にあったことはすでに述べた通りである。だが、こうした試みは、①改善への取り組み、②成果の検証、③授業者・学習者へのフィードバック、④さらなる改善の取り組みという循環を重ねることによってようやく実を結ぶものであると思われる。多くの研修がそうであるように、今回の試みが一回的なものではなく、日々の授業改善のサイクルのなかにもどるように転移され、組織的な取り組みへと架橋されていくのが重要な課題となるだろう。

#### IV まとめと今後の課題について

以上に見てきたように、2017年12月からアクティブ・ラーニング部会では月一回の会議を重ねると同時に、授業見学や研修会を行い、より良い授業づくりを目指してきた。日々、授業や様々な業務で多忙を極める教員たちが、ここまで取り組んでこられたのは、より良い授業を学生たちに提供したいという気持ちがあるからだろう。

もちろん、全教員が毎回授業見学や研修会に参加できるとは限らないが、こうした取り組みが今後も組織的な取り組みとして続いていくことで、いつでも「より良い授業」を目指して反省し、授業を少しでも改善していくきっかけを保持していくことが大

切だろう。したがって、これからもこうした取り組みを維持し、さらには大学全体で取り組むことが今後の課題となるだろう。

#### 【参考文献】

- 1) 木村充, 小山田建太, 山辺恵理子, 田中智輝, 村松灯, 中原淳 (2016). 東京大学—日本教育研究イノベーションセンター共同調査研究 高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点に立った参加型授業に関する実態調査 2015: 最終報告書. <http://manabilab.jp/wp/wp-content/uploads/2016/12/finalreport.pdf>
- 2) 木村充, 村松灯, 田中智輝, 町支大祐, 渡邊優子, 裴麗瑩, 吉村春美, 高崎美佐, 中原淳 (2018). 立教大学経営学部寄附型研究プロジェクト—日本教育研究イノベーションセンター共同調査研究 高等学校におけるアクティブ・ラーニングの視点に立った参加型授業に関する実態調査 2017: 報告書. <http://manabilab.jp/wp/wp-content/uploads/2018/10/report.pdf>